

座談会

なぜ十全大会路線はないのか

柴田 穂

(サンケイ新聞外信部長)

文革のハイライトは、毛沢東個人崇拜を絶頂に押し上げたことにある……

中嶋 嶺雄

(東京外国語大学助教授)

十全大会路線とはこれだという個人的なもの
が打ち出されているのか……

蔵居 良造

(朝日新聞平和問題調査会)

報告そのものがたまたまの場をこまかすための報告であるという感じが……

林彪批判でまとめる

柴田 今度の党大会の第一の特徴は、やはり僅か五日間で終ってしまったということに非常によく現われていると思う。恐らくはその前に西側も盛んに言っておりまして、われわれも「紅旗」の論文なんかで一つの路線、階級闘争優先論と、現実主義的な路線との論争ないし対立があったと思う。それを解決して党大会を開いていったのではなくて、恐らくその対立ないし論争を「林彪批判」という

一点に絞ることによって避けた、あるいは蓋を閉めた、そういう印象を受けるわけです。

ですから今度の党大会は「林彪批判大会」であったというのが最大の特徴だったと思うのです。

ということとは、結局この論争というのは非常に古くて長い論争であって、そう簡単に片付くものでもない。だから恐らく左派というか、文革派はこの論争を恐らく非常にやりたか、文筆家たちであるか、実務家たちであるか、現実主義的な周恩来を中心とするグループは、そういう不毛の論議をむしろ避けて、急

務となっている経済建設、工業化に向って早く実務的な処置を急がなければならないと考えたかもしれない。だから党大会そのものに対するアプローチの仕方が、両派の間で相当違っていたのではないかとこのように思います。

周恩来報告は三つに分かれていて、一つは九全体制、九全路線を継承しようということ、これを強調したわけです。しかしこれは、要するに、これまで九全大会で強調されたことを林彪を除いては完全に否定しない。つまり生産を後まわしにして、ちょうど「林彪批判」で

まとめたように、九全路線ということでは何かまとめようとしたのではないだろうか。

しかし、九全大会の立役者は林彪であるし、九全大会の三大決定は、何れも林彪なくしては存在しない。林彪の名前を明記した党規約、林彪の政治報告、そして林彪を副首席とする中央委員会、中央指導部という三つの決定ですが、林彪を除けばこれは存在しない。有効性を持ち得ない。

だから十全大会で林彪を批判しつつ、同時に九全大会の路線を継承しようというやり方には非常な苦悩というか、矛盾がある。

もう一つおかしいと思われるのは、もし九全体制、九全路線が生きているならば改めて大会を開く必要がないわけで、すぐ全国人民代表大会に進んでいいわけですが、それが事実上進めなかった。指導体制がガタガタになった。九全路線、九全体制が非常に形骸化されてしまった。だから十全大会を開く必要があったと思いますね。

路線なき党大会

中嶋 確かに、その通りなのだが、ちょっと違った角度から見ると、やはりこれは日本のジャーナリストも、世界のジャーナリス

トも、かなり啞然としたように、非常に異例の大会であったということですね。中国共産党史に例のない異例の大会であったと思う。

というのは、五日間という非常に短い期間ですべてが終って、その事実が事後に公表され、しかも大会開催中は全くの極秘であったという、いわゆる形式上の問題としても確かに異例であったが、むしろその問題もさることながら、内容的にはやっぱり異例であったと考えますね。

というのも、全国代表大会ですから、やはり中国が当面する諸課題も、一般的に再検討し、理論づけるというのが党大会の任務だろう。そして従来の中国共産党は全部やって来たと思うのです。

文革後の九全大会は確かに党規約改正その他非常に異常なものがあったわけだが、にもかかわらずともかく九全路線というものが打ち出されていた。ところが今回の場合は、たとえば十全路線とはこれだという、非常に個性的なものが打ち出されているか、そういう問題の理論づけがなされているかというところ、ほとんどなされていない。しかもこの間に中国は、内政的には文革以降の中国をどういうようにしていくかという大問題を抱えていたわけだし、対外的には米中接近から日中国

交、アジア情勢の大きな変化といったように九全大会以降の諸問題を抱えていたわけですね。そしてそういう情勢下で、中国自身が経済建設をどういうように進めていくかというそういう問題についての全般的な方向づけなり総括というものが、ほとんどなされないまま、十全大会がいわゆる「林彪彪批判」一色の一大儀式になったということ、それに対外的には「対ソ批判」ですね。この部分が非常に多くてそれを繰り返している。そういう意味でまさに非常に異例な大会であったというように考える。

林彪事件にしても過去の事件であるわけで確かに今回の政治報告によって、いかに林彪事件というものが党内に深刻な影を投げていたかということが明らかになったとしても、「林彪批判」なり「ソ連批判」というのはどれも一致し得る集約点だから、それ以外の問題を凍結し、当面これをもって調整するということであって、問題の解決ではなかったということですね。そのことがあらゆるところに出てくると思う。

それから周恩来の報告自身も、どうもいつものような余裕のある演説ではなくて、あちこちに気を配って周恩来らしさが余り出ていない。そういうような感じを受けた。党規約

改正報告にしても、七全大会の党規改正や、八全大会の鄧小平の党規約改正報告、これらはそれなりの理論性と思想性を持っていたと思う。やがて何れも問題になったのですが。それに対して、今回の王洪文報告は、ただ使い走りみたいに多くのことを言って、問題になるところを削除しているだけであって、余裕をもって十全路線というものを起しているかというところでもない。そこに今日の中国共産党のかなり大きな問題があるのではないか。

党大会は開くつもりだったか

蔵居 周恩来報告を読んで、一番気になるのは、例の路線の問題で、劉少奇によって八全大会の決議の中に押し込められたとされる国内の主なる矛盾は、プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾ではなくて、先進的な社会主義的制度と立ち遅れた生産力の矛盾であるという修正主義のデタラメな論の新しい情勢下における焼き直しであるという非難、これがちょっと気になるわけですね。

こういうことは、劉少奇の場合は盛んに言っていたが、林彪、特に陳伯達の場合は、どうも何かとってつけたような感がある。それ

ともう一つ、九全大会の報告は、林彪が別で作ったものがあったという、いかにもとってつけたような非難がありました。何か中嶋さんがおっしゃったように、この報告そのものが、ただその場をごまかすための報告であるというような感じがしないわけでもない。それともう一つ、何といったってこの大会のあり方ですね。どうも何か納得がいけないものがある。だからこそとやらなきやいけないうという国内情勢だったと思われる。

十全大会を開く真の条件が整わないのに、早く人民代表大会を開かなければいけない。それではないと国際的ないろいろな立場が困る、というようなことから逆算して、無理に十全大会を作り上げたという感じがする。

それともう一つ、党大会だと少なくとも中央委員クラスは全部出てなきやいけないでしょう。今度の場合は、八月二六日に新疆省の揚勇、それにサイフジンですか、この二人がこの日の新疆省の婦人会と総工会、その政治大会に出ているんですね。そうすると二四日から二八日の大会の間に出席しているのは飛行機で行って飛行機で帰ったかもしれないがちょっとこれはおかしいですね。いかに余裕のある大会だとしても、幹部以下うち揃ってピンポン大会に出て行くなんていうのは、こ

れもどうも、ちょっと普通なら納得できない。逆にそれを非常にうまくいったという証拠にしようとしているかもしれないが。

逆に言うと、大会というのはほとんど形だけであって、むしろ陽動作戦みたいに、パッと花火を上げることによって無理に注意をそらすという作意を感じる。そうすると何か非常にさし迫った情勢があるという気がしないでもないですね。

柴田 周恩来首相、それから廖承志中日友好協会会長が、訪中した日本人に対して、いろいろ発言しているわけですが、秋に全国人民代表大会を開くということだけを強調してその前に開かれるべき党大会について一言も言わなかった。これは非常に不思議なことだと思う。

だから、ともかく最少限、人事と林彪の除籍、党規約から林彪の項目を削除するというようなことを五日間でざっとやって、ウェイトをむしろ全国人民代表大会の方へおいて、綱領化に取り組もうとしているのではなからうか。

それから大会の前いろいろな異様なというか、異常な現象があった。八月一日の建軍節には、江青女史、桃文元の二人が欠席している。周恩来自身もいなかった。

この建軍節のあり方が何かを物語っている。それから江青女史が二カ月と一週間くらい、姚文元が一カ月と一週間くらい、つまりピンポン大会のセレモニーまでは姿を現わさなかった。

中嶋 こういう可能性はどうでしょうかね。つまり中国として党大会をこの時期に開くということは、当初予想していなかったのではないか。仮説ですが、むしろ全国人民代表大会をやるうとしていた。それでもってこの春以来いろいろ問題を討議してきたが、どうも問題がしっくりと決着がつかなかった。その証拠に建軍節の杜説が出なかったし、当日いろいろおかしかった。

そういう形で、どうも決着がつかなかったために、非常に変則的な形だけでも急遽党大会を開いた。強引に当面的問題を凍結させて、ああいう儀式を行うことよって一つの結節点を作ろうとしたのではないか。それが極秘のうちにとっかやっかというああいう不正常的な、さっきいろいろ話になったようなことになったのではないかという気がする。

毛沢東個人崇拜が消えた

柴田 それでこの党大会の特徴的なことと

なぜ十全大会路線はないのか

いえば、たとえば党規約の改正報告に関して日本の新聞の多くは、毛沢東の個人崇拜というか、称賛のところ、全部落ちていっていることを、余り大きく扱わなかった。林彪の項を削除したということばかりを強調している。しかし林彪削除というのはもうむしろ当然であって、むしろ党規約の中の最大の特徴といえますか、改正点は、毛沢東の過去における思想的な役割、それから毛沢東思想が現在のマルクス・レーニン主義の最高峰といったような思想的な位置付けとか、中国共産党が毛沢東によって率いられているとかいうようなことを否定したという点でしょうね。

毛沢東は今や党規約から事実上その名前を抹殺されてしまっている。残っているのは思想としての毛沢東思想であり、それもマルクス・レーニン主義と併記されているにすぎない。

蔵居 この前の規約の二条か三条に、いわゆる「朕は国家なり」というような意味の文句があったでしょう。日本の昔の憲法みたいに、「天皇は神聖にして犯すべからず」という。これに非常に似た言葉があったですね。それが今あなたが言われたように全然なくなったというのは、これはもう林彪問題以上に重大問題ですね。

柴田 かつてエドガー・スノーを通じて毛沢東の談話が発表された時に、個人崇拜は行き過ぎたというようなことを毛沢東自身が言っています。それにまた、文革中に作られた党規約、あるいは「毛語録」の流布、こういうような毛沢東個人崇拜というものが、毛沢東の意思に反して林彪によって振り撒かれたかのように印象付けようとしているのです。もし毛沢東に力があつたら、林彪がそういうようなことをしようとするのを止めることもできたし、あれだけ国費を使って「毛語録」を印刷することもなかった。

毛沢東が自分の死後も、中国が毛沢東路線によって指導されることを望んでいた。それを保障する道は自分の後継者をつくることであり、同時に自分が死んだ後、フルシチョフのスターリン批判のような毛沢東批判の起る道を封ずることである。

ですから毛沢東の個人崇拜と、それから後継者づくりというのは、まさに文革の本質的な問題じゃなからうか。最近では文革の本質に対して、いわゆる「老・中・小」ですが、老人・壮年・青年の三結合というようなのが文革のあたかも本質であったかのようにすりかえられて議論されているが、あの文革のハイライトというのは、毛沢東個人崇拜を絶頂に

押し上げたということですね。だからそれと後継者というものは不可欠の問題だったと思う。

従って、党規約から林彪の名を削除するとともに、人事面でもはや後継者、林彪型の個人的な後継者を設定しなかったということとは毛沢東の個人崇拜を党規約から消したことに密接に結びついている。毛沢東の後継者構想は崩れ去った。林彪に代わるものを毛沢東が希望したかどうかは別として、たとえ希望したとしても実現できなかっただろう。そうしますとやはり毛沢東の影響力の低下ということが十分に考えられる。

蔵居 どうもこの大会はいくら考えても納得できない。あの九全大会の報告は林彪が書いたがそれがだめで、結局、毛沢東が書いたなんてね、それは子どもだましみたいなことでしょう。そういう点でまるでとってつけたような、間に合わせに作ったという感じがしてしやうがない。

文革派と実務派が対立

柴田 両派の勢力が伯仲していて、論争の対立が激化していたのか、周恩来を中心とする穏建派がリードして、とにかくそういう論

争をむし返さないように蓋を閉めて全国人民代表大会へ行こうとしたのかというところはまだ判然とはしないが、党規約の毛沢東主席のところを削ったという点からみて、大会そのものは周恩来を中心とする現実派がリードしたという印象を受ける。

もし対立が何ら解決していなくて激突したまま開いたとすれば、これは五日間でも終らないし、毛沢東賛美を削るというようなこともできなかったのではなからうか。だから一八日から三日間開かれたあの集會が何かかわらないが、さきほどの仮説をそのまま採用すれば、党大会を開きたくないという勢力に対して、党大会を開こうという形の大衆集會的な、政治集会的なものであったのかもしれない。

中嶋 勢力が今も伯仲しているとは思いませんね。恐らく急進派と思われるのは少数です。今の状況では、それはその通りなんだが、そういう状況の中でむしろ主流派としてはここでやっちゃった方がいいのだという形で急遽やったような気がする。

八全大会は外国代表まで招いてやっているわけでしょう。現に外国代表も祝辞を述べている。九全大会にはそれはなかったが、新聞公報が前後にわたって出た。

蔵居 解放以前のまだ非合法時代にはもちろん、秘密にやっていた。それが堂々たる国家を建設した今日同じようにやったというのは、どう考えても異常です。

中嶋 あるいは中南海の中でやったのかもしれない。

柴田 その可能性の方が大きいでしょう。あれだけ外国の特派員がたくさんいて、人民大会堂には注目していたはずですよ、一八日の三日間の集會以後。だから中南海でしょう。

蔵居 それとこれは直接関係はないかもしれないが、香港のサウスチャイナ・モーニング・ポスト紙、これは中共系の割に正確な情報を提供している新聞で、しかも香港の立場からいうと余り北京の悪口を言いたくない立場だ。それが三〇日と三十一日の「社説」で、要するに両派の相克が非常に激しい、ということも書いている。八月二十七日のトップ記事では、極左派が対決に出ているという、こういう記事がある。

柴田 それは香港の新聞だけではない。北京発AFPが大会前に、穏建派と急進派の間に論争が行われている。これが党大会開催を長引かせているという、こういう報道をはっきりやりましたからね。北京でもそういう見方ができるほど対立があったというように見

るべきですね。

蔵居 だからやはり十全大会は安穩裏に開けるような客観情勢ではなかったということがはっきり言えると思う。それをなぜ強引にやったか、秘密裏にやらなければならなかったか、ということその二つの理由が何かということ、これが非常に問題だと思う。

大会の主導権は実務派が

………

編集部 そうしますと、秘密裏にやられたということ、それから全国人民代表大会は秋にやるといいながら、党大会開催の時期は全然触れてこなかった。そして、実際に事後発表だが大会を開いて、林彪については少なくとも批判をした、とこういうことになる、これが両派の純粋な妥協の産物ならば、必ずしも五日間の党大会を秘密裏にする必要もないわけでしょう。完全な論争点の決着がつかないかわりに、林彪批判だけでとりあえず党大会をやる、ここで一旦問題を凍結して、そこから辺に絞ろうという合意がもし両側の間にできれば、公然とやることもできるわけですね。

そういうことを考えますと、秘密裏にやったという最終的な形、それから実際やられた

内容から見ると、やっぱりどっちかの派が強引に相手を屈伏させているということ、この辺が一つは柴田さんあたりの感じですね。

柴田 それは党規約から毛沢東の色彩を除いた、つまり毛沢東以後も使える党規約にしたということ、たとえば林彪が死んだら、林彪の名前、後継者に明記してある党規約は途端に役に立たなくなるというふうなことを避けた。

つまり毛沢東的発想、論理、後継者を選ばなかったこと、それからそれを党規約に明記しなかったこと、そして毛沢東の色合いを除いてしまったということの一連のことを考えると、やはり周恩来の現実派がリードしたのではないだろうか。

そのことは人事面の分析をすればわかる。人事面で一番特徴的なのは、九全体制というものを維持しつつ、同時にそれが事実上薄められるというか、新しい人物を抜擢したりすることによって九全体制そのものを薄めちゃったという点でしょう。だから九全体制を根本的に変えたということではないと思うのですよ。

たとえば急進派では、江青、姚文元なんかを現状維持にとどまらせた。しかし、その上に新しい人物を抜擢することによって事

実上、江青、姚文元の地位を下げた。一方で鄧小平、陳雲、李富春、聶榮臻、等の副首相、それから軍の元老である徐向前、こういう人たちが政治局にはいってほしいはずなんだが、はいらなかった、という意味では九全体制を根本的に変えたものではなかった。従って今後の行政府、あるいは軍のこれからの動きによっては、この人事がまだ変る可能性をはらんでいる。

この指導部の中で一番注目されるのは、四段飛びをやった王洪文。この王洪文を見る場合に一番重要なものは、もし文革派であるならば、江青や姚文元となぜ一緒に上ってこなかったという点の一つ。それから王洪文が周恩来に近いという観測が北京の中国専門家の間から、出ているんだということにも注目していかなければならないでしょうね。

結局文革派が全体としては上ってこなかった。従って、どうも反革派の中に分裂というか、分断現象が起っていて、王洪文、張春橋は引き立てて、江青、姚文元は引き立てられなかったという印象を受ける。そうすると所詮引き立てたのはだれかという問題になるが、江青、姚文元が引き立てられなかったところを見ると、王洪文を引き立てたのは毛沢東であったというようには言えないのではなか

ろうか。

事実A F Pが北京の中国専門家の意見を書いているわけですが、要するに、大使のマナックを中心とするフランス大使館やイギリス大使館の中の中国専門家だろうと思う。そういう人たちの観測というのは、恐らく周恩来政府と、あるいは外務省関係者とですね、いろいろなコンタクトを持ちながらそういう認識というか、確認をとっているのだらうと思う。

だからA F Pの、王洪文は周恩来に近いというのは、かなり根拠があるのではないかと思ふのですよ。もう一つ、アメリカのワシントン・スター紙の特派員、これも去年九月頃から王洪文が周恩来の側近として党の実務や組織を任された、という見方をとっていますね。それから王洪文はどうも総工会の再建に功績があったらしい。そうすると総工会そのものが実は九全体制ができた六九年直後から再建が進んだのではなくて、割合最近になって急に進んだという印象を受ける。特に林彪失脚以後手が付けられて、今年の春から夏にかけて急速に進んだ。

従って王洪文が文革派であり、上海グループであったから、ナンバー・3になったんだというのはどう見てもおかしい。周恩来路線

がやっぱり工業化を目指し、本格的な新しい労働組合を今作っている。やっぱりこの工業化への激励と、それから労働者に対する激励ということではないのか。新しいモデル的な人物、年令からいっても、経験からいっても未熟な王洪文を第三位にもっていったのはそういう背景があるのではないか。

低下した毛沢東の威勢

蔵居 毛沢東の権威が落ちたということに對して、これは台湾の「中央日報」ですが、

これは全く逆の意味の分析をしますね。

柴田 台湾はそうですね。

蔵居 台湾の陳伯達と言われるような男が
つぎのように言っている。

十全大会の内外で、文革派は攻勢をとって形式上は周恩来に對して闘争をいどんでいるようだが、実際には党権を確立して、政権を固めようとしている。要するに軍に對する攻撃をかけようとしているんだ。それから、周恩来の目前の地位は空しくのぼっていきやつであり、実際には勢力が低下したと言うわけですね。虚にのぼって実は下る、というもので、党中央委員会の毛沢東の下で、周恩来は第一副首席になったにすぎないというような

見方をしております。それから、社説でも、共産党の権力の核心を分析してみても、敢然として、江青女史が大いに上ったということがはっきりした、というようなことを書いています。

中嶋 上ったという、それはどういう根拠ですか。

蔵居 その根拠は余り詳しく書いてないんですがね。それから十全大会の周恩来の報告というものは、全く前後矛盾していて、その矛盾は三尺の塔といえども一望にしてこれを見ることができるとも言う。

柴田 台湾でもこの周恩来派が優勢か、江青女史が優勢かということについて、今でも意見が対立しているのです。いまいわれた「中央日報」は江青派が強い、毛沢東の力が強いということが非常に強く出る新聞ですね。だから恐らく台湾の中でも論争があると思うのです。大体、アメリカ、フランス、欧米は、周恩来の力が一段と強化されたという面で一一致しているが、台湾はどうも毛沢東、江青派の力を過大評価する論評が非常に多いように思う。

毛沢東の力が強くて、同時に周恩来と江青の対立があるというのは、実は論理的におかしいのですよ。毛沢東が非常に大きな力を持

っているならば、周恩来はその忠実な行政官として振舞うであろうし、江青女史もまた毛沢東に忠実であるのだから、毛沢東の力が非常に強ければ、江青と周恩来の間にそんな対立が起るわけがないですね。

つまり周恩来と江青の間にもし対立が起るとすれば、やはり毛沢東の影響が低下してきたがために、そしてその結果として周恩来の独自の路線が出て来ているがために、江青派文革派からの反発が出て来るのであろうと、こういうふうには考えないと、矛盾するのですよ。

本命は張春橋か

蔵居 確かに毛沢東の権威は落ちていく。だから江青一派が周恩来の現実路線と対立する。それがさっきの「紅旗」なんかの社説になって、緩和路線と急進路線の対立として現われるのですね。紅と専の対立があるというその人脈は、やはり江青派と周恩来派という見方でしようね。

今度の場合われわれから見ると、むしろ江青などの地位が下ったように見えるのに、台湾ではむしろ上ったという。たとえば王洪文の場合、これもある一種のお飾り的なものだ

と思うのですが、かれをうんと引き上げたということは、彼が労働者の代表である。従って党再建の中核であるということ、この意味を非常に象徴的に出していると思う。しかし実際の力は何するのは張春橋だと見ますがね。

柴田 そうですね。それはそうでしょう。だから面白いことには、対立はあるのですが、その対立が「紅旗」なんかを中心に、論文で行われているというのが一つの特徴です。外交政策について、パンパン対立が出ているという証拠は余りない。批判はあるだろうということは言われていますが。それからまた現在の政策が非常に違っているし、むしろ劉少奇時代の経済調整政策に非常に近い形の物質的インセンティブを重視した、経済合理性を重視した體健路線がずうっと定着化しているし、それに対する別の急進政策がそれを妨害しているというわけでもないですね。

従って上海グループも、主として論壇といえますか、「紅旗」を中心とする論壇の上で活躍しているにすぎない。そうしますと現実派にとっては、そういう論争はやってもいい、実際の政策では実務的にとんどん現実主義路線をとっていいこう、それは全国人民代表大会

に反映される、そういう形ではなからうか。

そこにはやはり党が、文革以前のようない元的指導体制、また完全な機能を回復してない。だから、党自体の重みがまだ出てこない。いわんや党中央の文化宣伝とかイデオロギー部門のところをいかに握ってしようと、かつての党宣伝部が「人民日報」、「紅旗」から何から全部一元的に指導したような、そういう党中央の機能がまだ回復していない。現実には、具体的に政策を進めているのは、中央ではやはり周恩来路線であり、地方では軍管区の司令官を中心としている、党と行政が一緒になったような、そういう機能だと思っのです。従って九全大会以来、いろんな幹部が復活したが、それが必ずしも党の人事には反映されてこなかった。鄧小平なんかは、九全大会で党の書記の地位も全部奪われながらそれを少しも回復しないうちに副首相として復活している。だから党と行政の間に非常なアンバランスがあるわけですね。今度の十全大会でもまだそのアンバランスを直すことはできなかった。それが先ほど言った九全体制を根本的に変えられなかった理由だと思う。中嶋 かなり広範にいろいろな問題が出て

は七対三ぐらいの割合だと思っっているのですよ。柴田さんが論壇とおっしゃったけれど、ただ中国における「人民日報」なり「紅旗」というのは、やはり、かつて宣伝部であいう形で牛耳られたという前例があるだけに、普通われわれのいう論壇ではないわけで、その勢力範囲の一つの判定の現われではないかと思う。

だから紅旗の論文などでも、大体の感じですが、七対三か、八対二ぐらいの割合いですね。そのぐらいの割合で出ているわけです。路線の明らかに違う論文が。だからそれが現在の全般的な情勢の反映だろうと思う。そうすると、一体王洪文なら王洪文というのはむしろ両方に、七の方にも三の方にもいいような形でそういうプリンスであったのではないかという気がする。

実際には、蒞居さんがおっしゃった張春橋ですね。かれは非常に着実な発展、成長を遂げていますし、造反派と言われながら、上海グループ、江青サロンの出身だと言われながら、党官僚、軍官僚、そういうところと幅広く連携し得るようなもつと広い基盤で成長しようと思っっている。しかも今回副首席にならなかったわけですね。あえて王洪文がそれになっっている。王洪文はどうしても当て馬では

ないかという感じが拭えないわけです。

張春橋がこの地位についてとして、党規約改正報告か何かします。これで明らかに一つの決定的な評価が出来上ってしまう。だからあえてそれを避けたのではないか。しかし、張春橋は同時に、大会の秘書長という、九全大会では周恩来がやり、八全大会では鄧小平がやったと同じような役割を果たした。それでいて、あえて一歩下って名目的には副首席にならなかったというところに、むしろ張春橋に将来の可能性を考えられた方がいいような気がする。

蒞居 そういう気がしますね。

微妙な周恩来の立場

中嶋 ということになると、周恩来について若干柴田さんと違いがあるのではないかと思うのは、周恩来が非常に政治力を発揮していることは言うまでもないし、内外政策ともに脱文革ということではまさにその通りで、それ以外にないということとは周恩来にはわかり切っっていると思う。しかし、わかり切っっているが故に、かなりあちこち無理をしている。その無理が全然ないような状況ではないということですね。

ということは、周恩来の政治力が非常に大きなものになっていながら、周恩来が完全に安定した基盤の上に立っっているかというところ、常に反対派の三ぐらいの部分から足を引っ張られるということではないでしょうか。そのことが今回の政治報告の余裕のなさとか、恐らく本心とは違うような革命主義、階級闘争第一主義みたいなものを加味するということになって現われてくる。言っっていることとやっっていることが違う。

そういう全体のトーンだから、私は脱文革と言われるグループは、旧実権派プラス行政官僚であって、周恩来路線といっても、その連合軍であって、その連合軍がすべて今度の大会で前面に出て来ることは、さすがの周恩来も避けたし、それができない状況にある。だからウランフ、譚震林という、非常に重要な人物などを復権させ、そして中央委員クラスには旧実権派の李葆華とか李井泉ですか、李井泉なんか出て来たことに非常に注目しているのですが、こういう人物を復権させながら、そのいわば限度の中で政治局までは入れなかったということ、その辺に非常に反映されている状況があるのではないという気がする。

柴田 つまり九全路線を継承する形をとり

ながら、激突を避ける人事を実施していったという意味で、無理を避けて、摩擦を引き起さないようになし崩し的に変えていく。これは林彪失脚以後に現われたすべての脱文革化の動きがすべてそういう形をとっており、それをかなり長期展望に立ちながらやっていくところとすると、ある意味で周恩来の政治力が相当強まっていると感じるのでよ。

たとえば、紅衛兵を切り、文革派の極端なものから切り落し、それで革命委員会の主流になっただけで、やむを得ず文革派の奪権派を切り、そして陳伯達を切り、それでさらに今度は文革派、上海グループを分断させている。大体張春橋、姚文元が上海から離れた時点で、わたしは、これは分断ではないか、文革の基地であった上海との間を切ったんじゃないかという見方をしていた。

中央で仕事をすることとは、実は中央の宣伝部門なんか閉じ込められてしまったということであって、文革派が中央の宣伝部門なんかの地位を占めたとすれば、何故党中央の各部門の組織とその責任者が発表されないのか。発表されているのは対外連絡部の部長だけであり、ほかの組織部とか、宣伝部とかは公表されていない。だからそれをさせないような手が打たれてるといふ感じを受ける

わけです。

蔵居 全国人民代表大会そのものは大した力をもってはいませんね。

柴田 そうです。むしろ人民代表大会で決定される國務院の閣僚、これが今まで通産省なら通産省というところに軍事管制委員会がしかれていて、その軍事管制委員会の委員長がすぐ大臣に横すべりしたというケースがずっとあったのですが、恐らくそれがかなり手直しされるでしょう。やはり副首相として復活した五人は、依然として副首相だろうし、閣僚全体としては周恩来的色彩が非常に強いんじゃないだろうか。

さっきのワシントン・スター紙の香港特派員は、姬鵬飛、外務大臣の。それから次官の喬冠華国連大使、つまり米中外交に参加した人びとが非常に地位が上昇している。そしてニクソンが上海に着いた時これを出迎えたのは王洪文であったという形でくっついているわけですが、全国人民代表大会はまさに行政部門ですから、そこで決定されるものは、周恩来の色彩がもっと、今度の十全大会よりももっと強まるのではないかという感じがする。

中嶋 文革派と実務派の間の対立点というのは、内政面では、周恩来報告の中ではあって、陳伯達や林彪が生産第一主義的なことを

言ったが、これはけしからん。そうはいいながら、やはり文革路線の修正だと思ふ。文革路線を修正することによって、経済建設を中心に、まさに生産第一主義をとろうというのが周恩来じゃないかと思ふ。

ですから周恩来はあえて反対のことを言っている。そこにまた反対のことを言わざるを得ない周恩來の立場、いわば党内状況があると思うのですが、内政面での対立はそういう脱文革という問題だろうと思ふ。

対外的には、言うまでもなく米中接近以来の国家外交の展開。「紅旗」なんかには、たとえば階級闘争を忘れるなという論文が時々出ているわけですね。國際的な階級闘争を忘れて、現実主義をやっているのはけしからんとかそういう批判は出ているわけです。これは中国がやっていることを見ても当然そういう批判があり得るわけで、これに対して現在の主流は、むしろそういう方向を進めているが故に、ああいう形で今度の政治報告でも見られるように、いわばある意味では階級闘争を強調せざるを得ないというので、非常にうがった見方をすれば、そんなような形だろうと思ふ。

だから一口に言うと、やっぱり穩健派ないしは現実主義対急進派というような、ずうっ

と中国に一貫してあるパターンが、同じものとしてではないにせよ、いろんな形で常に再生産されて出来ているのではないかという気がしますね。

柴田 その論争について、具体的に現われているのは教育問題ですね。陳錫聊という遼陽軍区司令官のいる遼寧省の「遼寧日報」が「人民日報」に文化革命的な教育革命を強調した論文が出たのを追っかけるようにして、ある地方の農村で働いている知識青年の手紙というのを載せて、今度は人民日報がそれを一面トップに転載したわけです。

そこには文革の結果、農村にしながら大学の試験を受けなきゃならない。にもかかわらず一日に一八時間も働いていて、受験勉強が全然できない。彼は結局答案を白紙で出し、その裏にそういう手紙を書いたんですね。これは中国で問題になっているし、また両派の間で論争の的になっている教育問題。これを文革的な教育路線で進めていくのが、もっと文革前の状態、正常化へ戻していくのか、その論争が人民日報の二つの扱い方に非常にたっぷり現われている。

だから、恐らくは古くて新しい、いわゆる紅か専か、つまり技術、業務、生産重視か、それとも政治思想、あるいは階級闘争の優先

か、この論争が抽象的な論文ではなくて、どこまで旧幹部を復活させるのか。それから科学者、技術者をどこまで復活させるのか、そして教育をどういうふうに、変えていくのか。このように具体的な面で非常に現実派と急進派の対立の中で展開されているのではないだろうか。

そして結果的には、譚震林とかウランフといたるところまでが復活している。それから中央委員の中にはいわゆる科学者や技術者になり大幅にはいつている。教育もそういう形で非常に変質しつつある。だから全体としての方向は、革命のために、つまり紅を掲げつつ専重視、専への傾斜を強めている。そういうところじゃないかと思うのですね。

対ソ批判の強化か、改善か

柴田 対外政策の面では、対米対日政策が中国の今後にとって非常に重要なウエイトをしめるということはちゃんと位置付けられているし、恐らくその政策は基本的に変わりはないと思うのですが、対ソ関係についてはかんとんには割り切れないようだ。

日本では、対ソ非難激化、対決が強まるとこういう観測をしましたけれど、あの日の北

京のAFP電は、むしろ全く逆に、対ソ改善を周恩来が提案したという第一報を送ったのです。フランス特派員に聞いてみると、フランスの新聞はおしなべて対ソ改善の方に力点をおいて、周恩来報告を受けとったようですね。

事実周恩来報告の中では、ソ連の非難が厳しくやられているが、同時に平和五原則によって国家関係は調整し得るし、交渉によって国境紛争も解決し得るということが主張されていて、一種の二面姿勢ですね。わたしは社会帝国主義が出て来たから対ソ批判が強まったというようにはどうも思われないので、北京なんかで見ていると、ソ連現代修正主義という言葉が吐かれると、ソ連の代表はダーツと帰っちゃう。党もそれにつれて帰っちゃう。ところがソ連という言葉のつかない現代修正主義という非難に対しては、ソ連はそんなに怒らないわけですね。怒り方が違う。

従って党規約をソ連側から見ると、前の規約だと、アメリカ帝国主義を打倒し、ソ連現代修正主義を打倒するという規定がはっきりしました。今度の場合は、社会帝国主義という言葉が使われているが、そこにソ連という言葉はくっついていない。むしろ米ソに、超大国の覇権主義に反対するというのが言わ

れておって、超大国に力点がおかれている。それでそのあの帝国主義、現代修正主義、反動派という言葉にはアメリカとかソ連が付いていない。こういう変り方だから、規約自体にはそんな対ソ非難、対決姿勢がエスカレ、トしているというように見られない。

それからソ連の社会帝国主義の奇襲に警戒せよというようなことを言っているが、それならばなぜ早く国防大臣を決め、総参謀長を決めて体制を準備しないのかということになるので、これは、対ソ脅威を非常に強く言わなきゃならないという国内情勢と関連があるのではないか。

中嶋 米中接近に反対したのは、恐らく林彪を初めとする軍首脳であったと思うのですよ。これは米中接近に反対したということよりも、一般的な平和五原則外交なり、緊張緩和と外交なり、つまり国家外交の強力な展開ということにそれほどウェイトをおかなかったわけで、いわば人民の論理の形で非常に強硬に問題を決定するという、あるいは民族解放闘争を強化する形でもって問題を立てたが故に、周恩来的な国家外交の展開には恐らく反対したんだろうと思うのですよ。

だから、そうすると恐らくその点では対ソ関係についても、今回の政治報告のなかでは

林彪がソ連と結び付いていたとか何とか言われているが、やはりそういう連中は、対ソ関係に非常に強硬だったのですね。人民戦争の論理という形で林彪が出て来て、九全大会ではまさに戦争に備え、対外的に備えるという、対ソ臨戦体制ですね。そういう軍一色みたいな状況の中で軍部が強くなることに脅威を感じたのが党官僚で、ここで対立が起こった。

これが林彪事件の背景だと思うわけで、そういうことになると、むしろ今後に対ソ批判は非常に強く展開すると思う。周恩来的な国家外交を中国は進めなければならぬし、一方多極化世界と言われる今日の国際社会の中で、中国がそれを意識して動きまますから、ますますその点でも敵が必要になる。国内を固める上でも敵が必要になるわけで、そういう形で対ソ批判が非常に進むと思うので、その点で今度の周恩来報告というのがまざまざとそのことを見せつけている。

しかしながら、一方では平和五原則ということを書いてある。そうすると九全大会の時は、戦争に備えてソ連と本当に戦えというような調子だった。歯止めがなかった。その歯止めのないところに国家的な危機を感じて、これを抑えたのが周恩来でしょう。今度の場

合、周恩来みずから対ソ批判を繰り返しながら、一方でその歯止めを意識していますからね。言葉の上ではますます強硬になり、そして臨戦体制も強化されるでしょうし、防空壕ももっとどんどん掘るでしょうし、それから核開発も進めるでしょう。そういうことをやっていながら、九全大会みたいな形ではなくて、状況によっては理性が働き得る余地が残されているというような感じがしまね。

柴田 そうですね。それで対米関係がちょっと対日問題の解決と非常に密接に結び付いていたように、中国の工業化という最大の国益から見ると、ソ連よりもウェイトとしてはやはり日本がもっと中国にとって重要になってきている。対日政策についても恐らく周恩来派と江青派の間に対立があったのじゃないかというように思いますし、それを打ち破るためにも、田中首相をわざわざ上海へ連れていき、それから廖承志代表団がああいう形で来る、これで対日政策の成功を国内にキャンペーンするという形で急進派を抑えていったとこういう感じがするのですよ。

中嶋 ところが中ソ関係全般、中国を取り巻く環境を見ても、やっぱりソ連の中国封じ込め政策というのは着々と進んでいますからね。たとえば中ソ国境だけではなくて、南の

方を見てもインド亜大陸はほぼ今はソ連の影響下にはいりませんでした。アフガニスタンの例もそうですし、例のバングラデシュもそうですね。

そういう状況の中でソ連の影響が非常に南の方にも増大し、今度はアジア諸国にも、アジア安保というような形でいろいろ出てきている。それに対するいろいろなりアクションがあるかという点、戦争が起るとは思わないが、そういう形での国際政治、アジアの政治、中国を取り巻く国際政治の中での中ソ関係というのは、かなり長期にわたって非常にこじれていくのではないのでしょうか。

台湾の将来などということ考えた場合にも、バングラデシュ方式みたいなことを、やがて台湾が言い出す可能性がなきにしもあらずですし、そのことを意識するような言葉が今度の政治報告にはいつていますしね。

柴田 中ソ関係は、性格が変わってきている。パターンが変わってきたと思う。今までは中ソ二国間のイデオロギー論争であり、九全大会直前の両国国境における軍事衝突でした。ところがだんだんアメリカも中へ加わったような、アジアの中の四極構造の中に中ソ対立が持ち込まれてきてしまっている。そして中ソ両国が日本の技術、経済力をいかに自国の工

業化に役立てるかという、一種の争奪戦になってきている。性格としてはやはり外交戦であり経済戦になってきて、軍事的な要素というのが、後退しつつあるかというように思う。

中ソ対立イコール軍事衝突というようにすぐにとらえがちですが、アメリカが介入したことによって、ますます軍事的なウエイト、比重は減ってきているのではないのでしょうか。

蔵居 軍の力という点、林彪事件後の軍の始末というのが一番大きな問題ですね。

外国の新聞が大変なことを書いているが、軍問題が解決しない限り一切が解決しない。その点に今度の林彪事件も含めて、軍問題の処理というのが、中途半端だというふうに感ずる。

たとえば人事からいえば、葉劍英と李徳生を二人並べた。さっきの国防部長、参謀総長が決まらんということも、関連するんですね。二人並べて入れたということがすでおかしいですね。それから対ソ関係でも、結局その指導権という点、イニシアティブを持つのが軍ですから、軍をどうするかということで、さっきの右と左の対立に軍自体もその中に巻き込まれているかもしれないが、やはり軍権を、党権がどう奪回していくかということところが問題で、そういう観点から見ると江青

あたりの力がどうのこうのという問題もまた別の判断なり何なり出てくるかもしれないですね。

